

# 信じ続ければ応えてくれる

亀山東小学校 HP  
H.28年4月17日  
文責：校長（佐藤）



## 野口義弘さん（野口石油代表取締役社長）

野口義弘さんは、自らガソリンスタンドを経営し、25年近くにわたって、少年院や少年鑑別所から出所してきた少年少女等を、従業員として雇ってきました。受け入れた少年少女たちは120人になります。保護司をしている妻の言葉がきっかけになって、少年少女の受け入れを始めた野口さん、これまでガソリンスタンドの売り上げを持ち逃げされたりして、挫折しかけたこともありましたが、少年少女の成長を止めてはならないと、一人ひとりのケースに向き合ってきました。野口さんは少年少女達とどう向き合ってきたのか、その歩みの中で野口さんが得たものは何だったのか。これは、平成26年の5月にお聞きした講演ですので、話の内容もおよそ2年前のこととしてご理解ください。

「非行歴があっただけで、ハローワークに行っても面接で断られるので、お父さんのガソリンスタンドで雇ってくれないかと妻から言われたのが始まりでした。昭和58年、福岡県の小倉南警察署から少年警察指導員というボランティアを受けていたので、立場上恐る恐る雇いました。16歳の女性でしたが、16歳とは思われない化粧をして、シンナー、無免許運転、家出をした子です。家庭は豊かだったが、一人娘でちやほやされて育った大変な子でした。暴走族のリーダーと夫婦気取りで、夜遊びを転々としている状況でした。



9店舗経営していて、ガソリン以外にも商品を売っていて、実はその子が販売1位になって、そのことで彼女自身が自信を持ちました。『子供たちはみんな寂しい、絶対茶々を入れなくて、目線を一緒にして、とにかくゆっくり黙って話を聞いてほしい』と言う妻の一言をととても大事にしています。大人の人が聞いてくれたらと思うと、自分が困った時にこの人は助けてくれると思った時に、初めて心を開くということをその少女から実際に習いました。これまで認めてもらったことがないということで、ゆっくり話を聞くことによって、自分を認めてくれた、信じる人ができたと思うことが子どもたちにとって、とても大事なことだと思います。その少女は、今は普通の結婚をして、普通の家庭生活を送っています。現在39歳になりました。この子のお陰で、大勢の少年たちと目線を一緒にして話せるようになりました。

私は高校に行きたかったが、父親を中学年生の時に肺結核で亡くして、母親も高血圧で半身不随になりました。学校に行く状況ではない貧しい生活をしていて、その時に地域の方々がいろんな形で応援してくれました。バス会社に就職し、13人入社したが、中卒は私だけだった。地域の方々の愛情を受けて、それが今の子どもたちと相通じる思いがあります。結婚して子どもができたが、ミルク代が大変だった。

北九州に転居して、ガソリンスタンド業界に入りました。1年もたたずに大きな店舗の所長になって、平成7年に独立しました。最初は毎月赤字続きでしたが、洗車のサービスを始めたら、福岡県下でNO1になりました。

これまで雇った子どもは120います。中卒の子、不登校や引きこもりの子、鑑別所や少年院を出た子です。うちで雇ってくれることが地域でうわさになり、そういった子どもたちがきました。想像を絶

する生活をしてきた子どもたちです。自分で食べることができず、コンビニの冷蔵庫から万引きしてくる子、挨拶ができない子。でも、働くことによって、自分の住居に住み、収入を得る。就職することによって友だちができる。会社のルールを知る。不特定多数のお客さんとのかかわりができる。

教育をするのは私だけでなく、長男（４８歳）、次男（４２歳）、そして妻です。現在３３名の社員（アルバイト含む）のうち１７名が少年院を出た子どもたちです。周りから『大変でしょう？』と言われるが、そうではない。最初は私が教育するが、そのうちに、会社の先輩がやっている。少年院を出たばかりの子には、直近の先輩が指導するようにしている。その方がお互いの問題点を理解しやすい。初めて給料もらう。『大事にして使おうね。』と話す。でも、子どもの親がやって来て、給料を取り上げて、親がパチンコに使ってしまうという事もあります。

私の店ではお金を扱います。店員を信じて任せますから、半年経ったら売り上げの計算をさせます。いかに自信を持たせるかということが、私たち雇用する立場の者が大事にしなければならないこと。悪いところをなおすよりも、必ずいいところがあるので、『一ついいところを見つけなさい。それをしっかりほめなさい。』と言っている。裏切られることはいっぱいあります。店のお金の持ち逃げ、売り上げのごまかし、商品を奪われることなどいろいろあります。

普通の会社だったら、それでもうおしまいです。罪は罪としていけないことですが、最後まで彼らを信じます。６人グループがうちの店のガラスをたたきわって２０キロの金庫を持ち去ったことがありました。その中の１６歳の子が警察に自首した。彼は鑑別所に入りました。その子から手紙をもらいました。『自分はもう少し早く野口さんとかに会っていたら、こんなことはしなかったかもしれない。お母さんを今から泣かせたくないし、自分がちゃんとしていかなければいけないと気付きました。』という内容だった。嘆願書を出して身元引受人になり、協力事業所で８か月働きました。塗装の仕事をしたということで、２年間修行をして、その後独立しました。男の子も生まれて立派な生活をしています。今は、自分と同じ環境の子どもたちを雇っている。

『店長、あの子だけはやめときましょう。』と言われるが、その子は行くところがないんです。私は、自分が大変な時に地域の人から温かく接してもらった。『愛は与えっぱなし』という対応をうけた。罪は罪として償い、社会へ戻った時に、それまでの心とは違うものを持っています。だから私は雇います。どんな大人と出会うかで、人生が変わってくるんじゃないかと思います。

私は協力雇用主でもあります。犯罪に手を染めた人たちの更生や手助けをすることをしています。平成７年に独立したときに、協力事業所に登録しました。当時、福岡県５００万人の人口でしたが、わずか２２箇所しかありませんでした。北九州市１００万人の政令指定都市ですが、５箇所しかありませんでした。現在は、全国で１１０００箇所を越え、福岡県では３５０社、北九州市では８０社を越えるようになりました。

私の店舗では、地域の人たちが理解してくれるようになりました。住居や食料等を低価格で提供してくれます。就労支援は更生支援でもあります。うちのガソリンや商品はよそより少し高いですが、地域から理解されているので売れています。事件や事故が多いこともあり保険代が高いからです。でも、メリットとして、労働力の確保ができますし、事件や事故が起きた時は、そのことから社員が学び、社員教育だと思っています。信じることで、人間関係ができてくる。お金の問題ではない。子どもたちの感受性は大人の人には想像できないくらい大きい。私のところでは、成果主義を取っていない。私が少年たちと関わるようになって、私の生活も変わってきたし、私自身も変わってきた。役員報酬は辞退しています。辞退することによって、５～６人は雇えます。」